

“Tapered, than straight line!”

Packaging details are very important key for making a product in premium segment. Labels and neckers are important, however, may be easy way for everyone. Bottle shape is worth for consideration. When we look the wine field, the bottles in premium segment have moved to "taller" in recent some years in Europe, then, looks going to "tapered" now in the U.S. and Pacific, even though they are difficult to handle in bottling line. Neck-"tapered" bottles can be seen in premiums in Japan market. Elegant tapered line, rather than straight line, is traditionally premium shape, I feel. I can find tapered design in some impressive motor cars, both new (ex. Toyota Yaris/Vitz, a Japanese best-seller) and old (ex. Citroën DS, a "forever woowh car" for the enthusiasts). I can also find tapered lines in valuable artistic craft bottles (pictures: ancient Chinese, old Japanese and E. Gallé). In the following Japanese text, I write my opinion regarding with "tapered", by Q&A style. (Text: Sienna K. Emiri, Planning & Development G./ Kita Sangyo Co., Ltd.)

Q1 : 写真は日本で市販されている、お酒のガラスびんです。これらに共通する特徴はなんですか？



Q2 : 写真のワインびん（主にアメリカのプレミアムクラスのワイン）に共通することはなんですか？



Q3 : 写真は近年ヒットの小型乗用車「ヴィッツ」と「フィット」。それに一部エンスージアストに人気のちょっと古い車、「シトロエン DS」(仏) や「ローバー 3500」(英)。これらに共通する特徴はなんですか？

Toyota VITS (2002)



Honda FIT (2002)



CITROËN DS (1972)

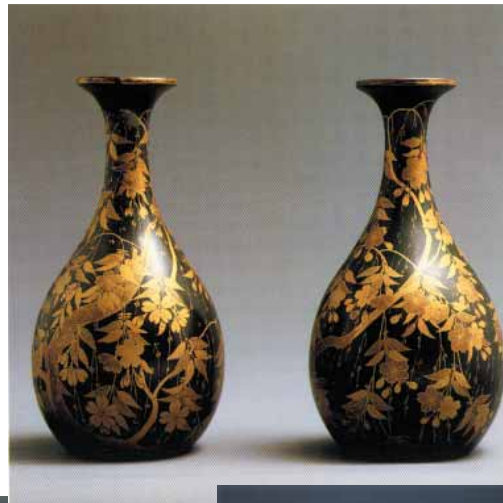


ROVER 3500 (1975)

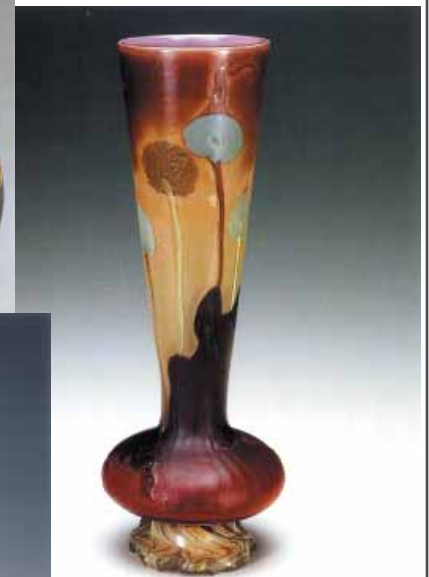
Q4 : 中国の古陶、日本の酒器、エミール・ガレの作品、これらに共通する特徴はなんですか？



青花龍波濤文天球瓶
(宣徳年間、台湾・故宮博物館所蔵)



枝垂桜蒔絵徳利 (漆器)
(桃山時代、MIHO ミュージアム蔵)



エミール・ガレの花器 2 点

(サントリー美術館など主催、「エミール・ガレ展 2000-01」カタログより)



鉄軸巴文瓶子
(鎌倉時代・古瀬戸、愛知県陶磁資料館)

Answer :

答えは、「すべて逆テーパのデザイン」であること。
すなわち「上(または前)に行くに従って広がる角度を持たせたデザイン」です。

シーナの私的分析

シーナは自動車好き、であります。昔から、見ただけで好きな車・嫌いな車がはっきりしているのですが、どこでそれが決まるのか、自分でわかりませんでした。それが、あるときふと気づいたのです。個人的に、素敵なスタイル、カッコいい、と思う車はいつも「後ろ下がりの屋根(すなわち、逆テーパの屋根)」であること、でした。

自動車の屋根のラインは、視覚的には水平のものが多く、後ろ下がりの屋根はクラシックなんだ、と思っていたら、近年大人気のピッツ、フィットとも後ろ下がりの屋根ラインが採用されていますね。ピッツ、フィットがこんなにヒットしているのは、フロントマスクもさることながら、サイドライン、すなわち後ろ下がりの屋根ラインが大きく利いてると、密かに分析しています。

仕事柄、ガラスびんを眺める機会が増えて、「ああ、これも似てる」と思ったのが今回の Sienna's Watching のテーマ設定。お酒の器(うつわ)のガラスびんでも、これはなかなかの優れたもの、と思うものはシルエットラインに「逆テーパ」、すなわち「上に行くにしたがって広がる角度がつけられている」ことが多いように感じます。それは、首のラインであったり(Q1の写真)、胴のラインであったり(Q2の写真)しますが、よく観察すると、ごく微妙な、というか、上品な逆テーパ角が、これらのびんのキャラクターを決定しています。

「1度あるかないか」といった微妙な逆テーパの場合もありますが、そのわずかの角度でもストレート(垂直線)にはないシルエットの美しさを感じます。ごくごくわずかな角度の場合には、実際のびん外面の角度もさることながら、ガラス肉厚を含めた視覚的外観として逆テーパに見える、という場合もありますね。

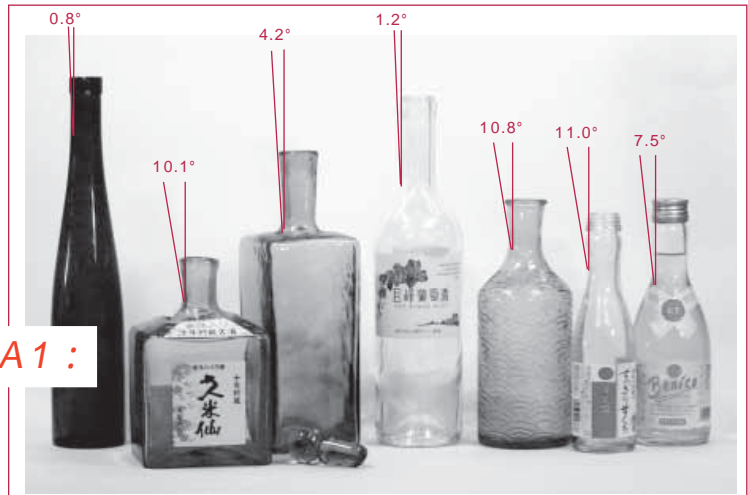
流行(はやり)は好きではありませんが、ワインびんの場合、ヨーロッパでここ数年、背が高いものが流行した後、現在は新世界(ニューワールド)でQ2の写真のような、テーパびんが「きて」ます。友達が勤めているアメリカ・ナバの某ワイナリーでも、最近レゼルバ・クラスはテーパびんに切り替えたとのこと。彼いわく、「充填ラインでびんの肩同士があたらないうえ間隔をあけるようにしないといけないし、工場サイドとしては扱いにくい。でもすごく高級感でたし、モデルチェンジは大成功だね」と。

流行(はやり)ばかりでなく、ここ二 - 三千年の間に作られた由緒正しいプレミアムの器には、洋の東西を問わず微妙な逆テーパが採用されたものが多く見られる、というのがQ4の設定です。特に、古今のギリシャ・イタリア・中国・日本などの名陶の酒器には上品な逆テーパをテーマにした一群があると思います。

以上をまとめて、Q1 - Q4のすべてに共通する答えは「逆テーパ」です。まっすぐな線を引きたいところに、逆テーパの線を使うことで、上品で高級感のあるお酒の器(うつわ)ができると思うのです。

(余談ですが、Q4掲載の日本漆器の所蔵元の MIHO ミュージアム、ってご存知でした? アメリカの友人が日本に初めてやって来て、東京、京都、鎌倉など日本各地を2週間ほどかけてまわったあげく、「東京、京都の国立博物館・美術館より、MIHO ミュージアムが一番印象的だった」と言い残して帰りました。それを聞いて初めて知って、私も行って見ました(滋賀県の奥深い山の中!)が、確かにすごい、いつの間にこんな美術館できたの、という感じでした。)

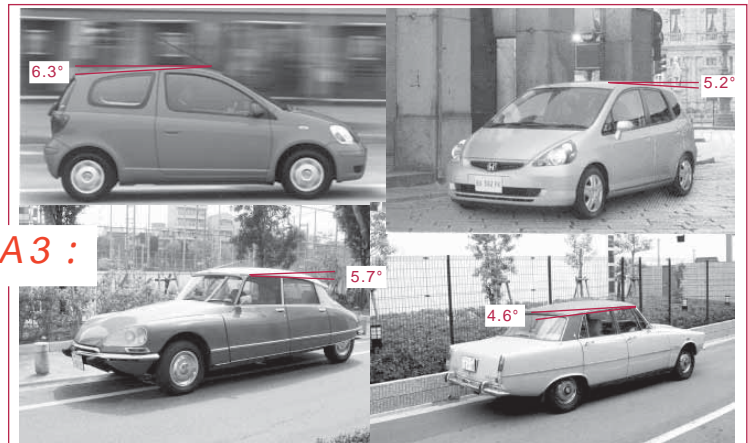
(Text : シーナ K. エミリ 喜多産業 / 企画開発 G)



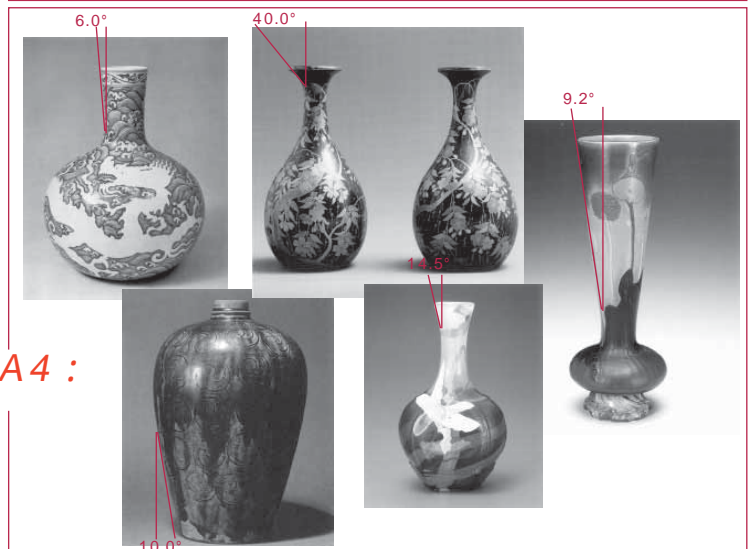
A1 :



A2 :



A3 :



A4 :